楊八老、紹興府にて奇しきめぐり逢いをすること

（明）馮夢竜編『古今小説』巻十八

さて元朝の至大年間（一三〇八～一一）に、姓は楊、名は復という人がおりました。八月中秋節の日（十五日）の生まれであるところから、幼名を八老といって、西安府蓋屋県の人です。妻の李氏との間に七歳になる男の子がありますが、生まれつきずば抜けて賢い子供で、世道と名づけ、夫婦こよなく可愛がっていたことは、いうまでもありません。

ある日のこと、楊八老は李氏に向かって相談を持ちかけました。「わたしは年はもう三十に近いのに、学問の方は物にならず、家の暮らしも日増しにつまってきた。うちは先祖の代から福建・広東で商売をしている。わたしも資本の少しもあつめて商品を仕入れ、漳州（福建省）へ商売をしに行き、幾分かのもうけを得て、家の暮らしのたしにしたいと思うのだが、お前はどう思う」

すると李氏が申しますには、

「家を治めるには勤倹が本だとわたしは聞いております。株を守って兎を待つようでは、さきが思いやられます。あなたはまだお若い働き盛りなのですから、今のうちにうんと羽

をのばして下さい。さっそく、旅支度をととのえなさいまし。躊躇なさることはありませんわ」

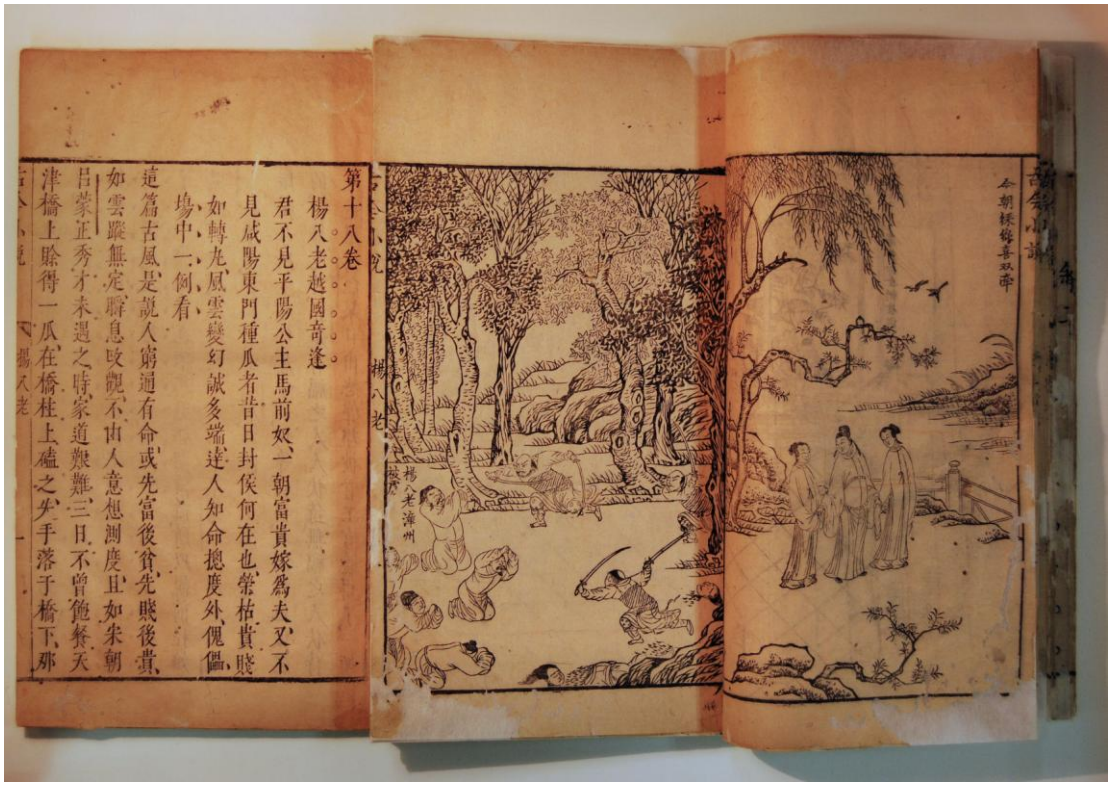
「そういっても、まだ子供は小さいし、お前も若いんだから、安心できないのだ」

「この子は幸い大きくなりましたし、わたしも躾ぐらいはできます。でもどうか早く行って早く帰って下さいましね」

その日、相談が決まって、吉日を選んで旅立ち、妻子と別れます。随童という小者をつれ、家を出ると船にのりこみ、東南めざして出帆しました。（中略）

さて、楊八老は漳浦県(福建省)にたどりつくと、檗おばさんの家に下宿して、もっぱら広東地方の商品を仕入れることにしました。ところでこの檗おばさんには男の子がなく、娘が一人あるきりです。年は二十三で、前に入婿を取って、暮らしを手伝わせていたのですが、その婿も亡くなって、もう一年以上になり、娘は後家をたてて家にいます。

檗おばさんは楊八老が元手も豊かだし、それに人間が物堅く、人あたりがよいのを見てすっかり気に入り、ぜひとも娘の婿にむかえて老後の面倒をみてもらおうと懇望しました。八老は最初のうちはなかなかうんと言いませんでしたが、檗おばさんから、



（明）馮夢竜編『古今小説』（法政大学図書館蔵）

「ねえ楊さん、あなたははるばる故郷を離れて知らぬ他国においでになってさ、もしも近しい身寄りがなかったら、万一の場合、一体だれが親身になってあなたの世話を見てくれますか。いま、うちの娘は年も若いし、旦那とちょうどお似合いです。『二人妻』となさったらどうですか。そうすればお郷里に帰れば奥さんがいらっしゃるし、漳州へおいでになれば、うちの娘がいるわけで、両方行ったり来たりして、どっちにいらしても淋しい思いをなさらないですみますし、ご商売をなさるにも何かと都合がよく順調にいくというものです。わたしの方でもあなたに大金をつかわせる気はありません。ただこの一粒種の娘によいお婿さんを取ってやって、のちのち子供を生んで、この家の血統をついでくれればと、わたしはそれだけが望

みなのです。お郷里の奥さまがお知りになっても、多分お腹立ちにはなるまいと思います。旅に出ると、大抵の男の人は遊廓や芸者屋でお金をつかい散らし、それがあたり前のことになっていますものね。旦那、長い目でみてどっちが得かとくとお考えになって、どうか承知して下さいよ」

と、そう言って再三再四くどかれ、八老は彼女のいうことにも一理あると考えまして、とうとう承諾し、吉日を選んで式をすませ、檗家の入婿になりました。そして夫婦仲睦まじく暮らしたことはさておき、二ヵ月とたたぬうちに檗氏は身ごもり、一年たって一人の男の子が生まれました。家中大喜びで、三日目の産湯の祝いや満一と月の祝いに、親戚が集まってお祝いしたことはいうまでもありません。

さて楊八老は故郷に残した若い妻と幼い子供のことが気にかかりますので、結婚して一年か半年したら、ぜひ一度様子を見に郷里に帰ろうと、初めのうちこそ思っていたのですが、妻が身重になったので、安心して旅立てなくなり、そのあと子供が生まれると、こんどは檗氏がどうしても離そうとしません。光陰は矢の如く、いつしか三年たってしまって、子供も満二歳になり、世徳と名づけて、世道と兄弟ではありますが、檗氏の姓をとって、檗世徳と呼ぶことにしました。

楊八老は、ある日檗氏に向かい、ちょっと陝西に帰って、妻子の様子をみて来たいと言いました。檗氏はしきりにひきとめようとしましたが、結局仕方なく承知しました。八老は商品をまとめて、出発の準備をし、また貸し勘定になっている分もありますから、随童と手分けして連日催促してまわります。

八老が貸金の催促のため州の役所の前を通りかかると、告示文がかかっており、それには、

「最近上司から次のようなお達示を受けた。倭寇がやって来て、沿海地方を荒し廻っているから、各州県では、十分警戒を厳重にして、その侵入を防ぐように。すべて人の出入りは訊問を行なうこと。城門は遅く開き、早く閉じるように……」

といった意味のことが書いてあります。八老は読み終わってびっくりしました。そして考えますには、

「せっかく旅立とうとしていた矢先に、倭寇の侵入とは！もしも倭寇が早晩やって来た日には、城門は閉まるし、いつの日平静にもどることやら知れたものじゃない。いっそ早いとこ出掛けてしまうにこしたことはない」

そこで、掛取りに行くのをやめて、そのままひっ返し、たまっている勘定は、今すぐと

いってはとても取り立てられそうになかったから、こんどまた帰ってから催促しても遅くはあるまい。途中には倭寇がいると聞いたので、商品はもって行かないで、あまりかさばらぬ身の廻り品だけをまとめあげ、明日さっそく出立することにしました。檗氏は別れをせつながって、三つになる子供を抱きながら、夫に向かって申しますには、

「母は老後の頼りがないために、わたしをあなたに嫁がせたのです。幸いこの子が生まれて、家のあと取りができました。わたしのことはともかくも、どうかこの子に免じて、ぜひとも早く帰って来て下さいましね。わたしたち母子をあんまり待たせないで下さいね」

言いおわると、思わずはらはらと涙をおとすのでした。楊八老は、

「お前もそう心配することはない。三年のあいだ、浅からぬ愛情に結ばれた夫婦仲じゃないか。こんどの旅も、万やむを得ないことなのだ。一年か半年もしたら、必ずまた逢えるのだから」

とやさしく言ってきかせます。

その晩、檗おばさんは送別の酒もりを開きました。

あくる日の朝、楊八老は起きて身じまいをし、姑と妻に別れを告げると、随童をともなって出で立ちました。ところが二日とたたぬうちに、びっくりする目にあったのです。

楊八老は、村の人々が押し合いへし合いしながら、ぞくぞく城内に逃げこみ、倭寇が放火殺人をしながら攻めて来ており、官軍はそれを防ぎ止めることができぬため、もうすぐ間近にせまっていると、口々に話しているのをきいて、魂も身につかぬ思いです。今は進退きわまって、どうにもよい考えがないので、仕方なしに人々のあとについて、ともかくも汀州（福建省）の城内にたどりついた上で、あとは何とかしようと考えました。

かくてまた二時ばかりも歩いて、城まであと三里（一里ばわが六町、以下同じ）ばかりのところへ来た時です。突然、大地をゆるがす喊の声が起こったかと思うと、後方の人々がわあわあ泣き叫び出しました。さてこそ倭寇が殺到して来たのです。人々はあっといったとたんに、腰がへなへなとなって、走り出そうにも動きがとれません。楊八老は近くに見えた森を指して、藪の中を逃げて行くと、大勢の人々もそのあとについて森の中に逃げこみました。ところが倭寇はなかなか奸智にたけておって、大抵四方に伏兵をおいているのです。この時も森の中からまず一人の倭奴が跳び出して来ました。人々は相手を一人きりだと見くびり、今しも勇気をふるって一斉に打ちかかろうとしていますと、その倭人はほら貝をとってぶーっと吹きならしました。と、四方にいた大勢の倭寇どもが、てんでに長いだんびらを振りかざしつつ躍りこんで来ました。全くどこからきたのかわからないの

でず。いささか腕におぼえのある幾人かのあらくれ男が、武器をとって必死に立ち向かいましたが、まるで火の中の雪か、風の中の塵のようにたわいもなく、倭寇のために一人一太刀で、それこそ瓜や野菜でも切るような具合に、ばたばたやられてしまいます。人々は魂消て一斉に跪き、口々に命だけはと手を合わせるばかりです。

ところで倭寇は、中国人を見つけたからといって、だれもかれも皆殺しにしてしまうわけではありません。女を捕虜にすればほしいままに姦淫し、さんざん弄んだ末には、殺さずに逃がしてやります。中には情を解する倭奴もおって、人並にそっと贈り物をすることさえあります。しかしこれらの女は命こそ助かったとしても、一生人の笑いものにされるのです。男の場合は、年寄り子供だけを殺し、強そうな男だったら、むりやりつかまえて髪を剃り、漆をぬりたくって倭奴に変装させ、いざ合戦という時には、これを陣頭に押し立てて進むのです。官軍の方ではただ首を一つ取りさえすれば、褒美が貰えるので、瘡っ禿げでもあれば、普通の良民だろうと何だろうと、その首を切って手柄にしようと思っているくらいですから、まして現に戦場でつかまえたのだったら、本物だろうと贋物だろうと、絶対に赦されることはないのでず。ですから、これらの頭を剃った贋倭奴たちは、どっちを向いても助からぬ、どうせ死ぬなら、いっそ倭寇の勢にたよった方が、まだしも幾

日か生きのびられるというわけで、同様に凶暴な力をふるう。本物の倭奴は贋倭奴を陣頭に押し立てて突進させ、自分はその後について進むので、官軍はしばしばその計略にひっかかってやられてしまう。（中略）

楊八老は一群の人々とともに、全部倭寇の捕虜となり、まるで甕の中のすっぽん、釜の中の魚のように、逃げかくれる場所もなく、今はともかく生きるために、その言うなりになるほかはありません。随童の姿は見えず、その生死すらもわかりません。この場に及んでは、自分の身すらどうにもならないのでずから、まして他人を顧みる暇などあろうはずはありません。

八老が思いなやんだことはさておき、倭奴どもは郷村で多くの金銀財宝を略奪して、すっかりほくほくものです。そこへ元朝の大軍がやってくると聞き、奪いとった多くの船に、捕虜たちを駆って乗船させると、一斉に船出し、意気揚々と日本国指して帰って行きました。

だいたい、倭奴がこのようにして中国に入寇していることを、本国の国王はほとんど知っているものがないのです。つまり島々の窮民が仲間をつどって海に乗り出すので、中国の盗賊のような具合に、向こうではそれを商売同様に考えているのです。略奪に出かける

時には、それぞれ部隊を編成して、その首領は白ら大王と号しています。ところが本国へ帰れば、またもとのように口をぬぐって素知らぬ顔をしている。略奪して来た財宝は全部山分けするが、十分の一か二を本島の頭目に献上して、お互いに隠し合っております。かりに中国人に殺されたとしても、商売をして元手をすったのと同じだくらいに思っています。虜にした屈強な男子は、奴僕として使い、頭を剃り、両足はむきだしにして、自国人と同じ恰好をさせ、これに刀や槍を与えて合戦の法を仕込みます。中国人はこわいから、服従しないわけにはいきません。こうして半年一年とたつうちには、土地にもなじみ、倭語も話せるようになって、とうとう本物の倭奴と異うところはなくなります。

光陰は矢の如く、この楊八老は日本国に来て、いつの間にか十九年もたちました。彼は毎夜ひそかに天に向かって祈りを捧げるのでした。

「願わくは神明のお加護により、再び家郷にもどって、妻子と再会できますように」

こうして来る日も来る日も怠らず祈りつづけておりました。

さて元の泰定年間（一三二三～二七）、日本国では飢饉が起こり、倭奴どもは徒党を組んで、またもや中国に入寇し、楊八老もいっしょに連れて行かれることになりました。八老は心中一つには喜び、一つには心配しました。喜びというのは、この機会に乗じて、中国

『倭寇図巻』（東京大学史料編纂所蔵）

に渡れるからで、陝西と福建の二ヵ所だったら、どちらにも親属がいて、天のお加護で万一肉身と再会する日がきて、ふたたびいっしょに暮らすことができるかも知れません。心配したというのは、この身は全く倭奴の姿になり果てており、自分で鏡にうつして見てさえびっくりするくらいですから、他人が見てこれを楊八老と知ってくれようとはとても思われません。ましてや刀槍は無情です。こんどの旅は、どう見てもよいことはなさそうで、みすみす命を落としてしまうのではあるまいか。ただ一つ、せめてものお願いです、むしろ死んで故郷の鬼となるとも、夷国の人となって生きたくはない。お天道さま、どうぞお慈悲にこんどの航海には陝西か福建かこの二ヵ所のどちらかに船を着けて下さるように。ほかの場所だったら、中国に行き着いても無益です。

だいたい、倭寇の航海にも、天命というものがあって、

その時の風向き次第なのでず。もしも北風だったら広東方面を犯し、東風だったら福建方面を犯す。東北風なら温州方面、東南風なら淮揚といった具合です。この時は二月のことでしたが、倭奴たちが船に乗って岸を離れると、東北風が大いに吹きつのり、つづけて数日吹き止まず、まっすぐに温州方面に向かって進みました。当時、元朝は太平が久しくつづいたため、沿海の防備もおろそかで、幾隻かの船と、幾百の年をとった弱い兵士がいるにはいますが、みな防戦する力もなく、尻に帆かけて逃げてしまい、倭人どもは悠々と上陸して、おさだまりの放火殺人であります。

楊八老は内心いやではありますが、隊に従い行動を共にしないわけにはゆきません。こんどの倭寇は二月から八月までつづきましたが、官軍は数回の戦につづけざまに敗れ、いくつかの都会が略奪に会い、転じて寧波・紹興を掠め、さらに餘杭（いずれも浙江省）に到り、その凶暴さはいちいち述べ尽くすことができません。

各府州県から急を告げる上奏文をしたためて、朝廷に上奏しましたので、天子さまは勅旨を兵部に下し、平江路の普花元帥に対して、軍隊をひきいて討伐に向かうよう命令されます。ところでこの普花元帥というのは、まことに智謀にたけた人で、それに部下には多くの精兵良将がいます。命令を受けるとただちに出兵に決し、威勢堂々と浙江方面に向か

って進軍して来ます。前哨は倭寇が清水閘（浙江省上虞県にある）を占領して根城としているのを探知したので、普花元帥は浙江省の兵馬と申し合わせて、水陸並び進みます。倭寇の方では、かねがね官軍を軽視していますから、なんとも思っていません。ところが普花元帥の下には十人の統軍（司令官）がいて、いずれも万夫不当の勇士であり、軍中には多くの火器をたずさえた兵士を四面に伏せて、倭賊との戦闘今や酣という時に、一斉に起ちあがって火器をぶっ放したものですから、敵は逃げ路を失ってさんざんに敗れました。斬り取った首が千余級、生捕りにしたもの二百余人、船をうばって逃げのびた者も、中国の水軍に退路を絶たれて殺され、水に落ちて死んだ者も多かったのであります。普花元帥は大勝利を博して、三軍をねぎらい、なお倭寇の残党が生き残っているかも知れぬというので、兵を出して四方を探索させます。

話は二つに分かれまして、さて清水閘のほとりに順済廟というお宮がございます。この神はもと姓を馮、名を俊と申しまして、銭塘（杭州のこと）の人であります。この人が十六歳の時に、玉帝（天上界の最高神）が天神をつかわして令を伝え、その腹を切り割き五臓六腑を換えていったという夢を見まして、醒めてなおお腹が痛かったそうであります。幼いときから学問する機会がなく、全然字を知らなかったのですが、この時から忽然とし

て悟りを開き、どんな書物でも知らないものはなく、筆を下ろせばたちまち立派な文章ができ上るという風で、また将来の禍福を予知することもできるようになりました。そしてある日のこと、家の中に臥せっていましたが、いくら呼んでも起きず、大分たってからやっと目を覚ましたかと思うと、

「東海竜王の所へご馳走に呼ばれて行き、竜王に酒を強いられてつい酔い過ごしてしまった」

てなことを申します。家人はむろん信用しなかった。ところが吐き出されたものが、みなこれまで見たこともない海の珍味ばかりでありましたので、はじめてそれが真実であったと知りました、三十六歳になった時、突然人に向かって、

「玉帝はわたしを江濤の神に任命なさった。三日の後、必ず赴任せねばならぬ」

と言ったが、その日になると、病気もないのに死んでしまった。この日、江中に大波が湧きおこり、行き交う舟は今にも覆らんばかりでありましたが、突然、朱色の旗、黒い天蓋、白い馬、紅い纓の行列が、ひとりの神様を擁して、雲の端に姿を現わし、その神様の口から叱咤の声が洩れたかと思うと、やがてさしもの大波が急に静かにおさまってしまいました。土地の人に聞いたところでは、その神様の相貌が実に馮俊その人であったというので

あります。そこですぐさま彼の住んでいた所に廟を建ててこれを祠り、順済廟と名づけました。宋の紹定年間（一二二八～三三）に、重ねて英烈王の号を贈られたのですが、この神はたいへんに霊験あらたかでありました。

倭寇が清水閘を占拠していた時、楊八老はこっそりこの廟にはいって祈り、おみくじを引いてみますと、大吉と出ましたので、心中ひそかに喜びました。そこで以前にいっしょに捕虜になった都合十三人でもって、官軍がやってきたら、進んで投降しようとしめし合わせました。しかし官軍が本物も贋物も見さかいなく、つかまえて行って手柄にするのではないかと危んでどうしたものかとためらうのでした。

この八月二十八日に到って、倭寇は大敗し、楊八老と十二人の者は、全部順済廟の中に身をかくしましたが、うかつに出るわけにも行きません。まさに進退きわまった時、突然、廟の外でわっとあがる喊の声。これぞ老王千戸（大隊長）、名を王国雄とよぶ者が、官軍をひきいて廟を捜索に来たのでありました。十三人の者は悉く生け捕られ、高手小手にいましめられて、廊下に釣るされました。みなみな口々に冤罪をとなえ、本物の倭奴ではないと訴えましたが、むろん相手にされません。この時、すでに日も暮れましたので、老王千戸はその晩はそのまま廟中に泊まり、明朝役所に護送して褒賞にあずかることにしました。

ところで偶然ということはあるものです、老王千戸の身近に仕えている家人の、王興という者が、夜中に起きて手洗いにいきますと、廊下で泣き叫んでいる声がして、その中に陝西なまりと覚しいのがあります、で、非常に不思議に思い、こっそり燈をつけて行って、照らして見て、楊八老の顔を見るに及んで、はてなと思い、そこでたずねて言いますには、

「お前たちは本物の倭奴ではないと申すが、じゃあどこの生まれなんだ？どうして倭寇の仲間にはいり、しかも同じ恰好をしているのだ？」

楊八老が訴えて申しますには、

「ほかの連中は全部福建の者で、わたくしだけが安西府盩厔県の生まれでございます、十九年前に漳浦に商売に行き、倭寇の捕虜となって連れ去られ、頭は剃られ、足ははだしにされて、あらゆる苦労という苦労を嘗めました。みなの衆も同じ時にやられたものでございます。こんどこの地についたら、すぐさま自首して出たいと思ったのですが、何しろこんな怪しげな身なりでは、知った人にでも出遇わないことには、とても信じてはいただけまいと思い、どうしたものかとためらっていた次第でございます。幸い官軍が勝ち、倭寇が敗北しましたので、これでわたくしどもはふたたび日の目を仰ぐことができるものとあてにしておりましたところが、意外にも老将軍には詳しいお調べもなく、そのままひっく

くって釣るしてしまわれました。明日軍門につれていかれましたら、もはや助かる見込はないと存じます」

彼が話をおわると、みんなは声を放って泣き出しました。王興はあわてて手を振って、

「大きな声で泣くんじゃない。ひょっと老将軍がお目覚めになったら、かえってまずいことになる。ところで、その安西府の男とやら、姓名は何と申すか」

楊八老が申しますには、

「わたくしは姓は楊、名は復、幼名を八老と申します。どうやらあなたさまも陝西のなまりのようでいらっしゃるが、もしゃ同じ郡のお方ではございませぬか」

王興はそれをきいて、あっと驚き、

「それではあなたはわたくしの元のご主人！　随童を覚えておいででしょうか。わたくしがそれでございます」

「どうして覚えていないことがあろう。ただ顔の様子がもとのようじゃないから、面と向かいながらも全然わからなかった。あの時福建で別れ別れになったのが、どうしてここへ？」

「詳しい話はあとで致しましょう。明朝老将軍が護送をはじめられる時に、わたくしが傍

に立っておりますから、あなたはじっとわたくしを見」て名前を呼んで下さい。そしたらわたくしが進んであなたのために申し開きしてあげますから」

そう言い終わると、燈を下げて行ってしまいました。人々からわけをたずねられて、八老がだいたいのあらましを話しますと、喜ばぬ者はありません。（中略）

だいたい、随童は楊八老についていた時にはまだやっと十九歳だったのですが、それに十九年を加えた今日、三十八歳の人間になっているわけですから、咄嗟にそれとわかるはずもありません。はじめ主人と別れ別れになって、廁の中にかくれ、幸いにも倭寇につかまらずにすんだのです。その時分、老王千戸はまだ百戸（小隊長）の職の時でありましたが、兵をひきいてそこにおり、偶然彼に出会い、その利口なのを見こんで来歴を問い、白分の側近の使用人として引き取り、彼が主人の消息を訪ねるのを許したのです。ところがまるで音沙汰がありません。その後、老王百戸は勲功を立てて千戸に昇進し、浙江地方の役人に転勤となりました。随童も名を王興と改め、身辺の非常に有力な家人となったわけでず。これもやはり楊八老の運が尽きていなかったからで、否極って泰来り、天は主従を再会させて下さったのであります。

閑話休題。さて老王千戸はあくる朝、勢揃いがすむと、十三名の倭寇を解き下し、軍門

に護送して褒美にあずかろうと、いざ出発という時に、突然倭寇犯人の中の一人が、王興をじっと見て、声高に叫びました。

「随童！わしはお前の昔の主人だ。どうかわしを助けておくれ！」

王興はわざとたしかめるふりをしてから、二人は抱き合って泣きました。何しろ話がもう大分古いことなので、老王千戸もそのわけを忘れてしまっておりましたので、驚いて王興を呼び、その理由をたずねました。王興はつぶさに訴えて申しますには、

「これこそわたくしが十九年前に別れ別れになったご主人でございます。あの時いくらさがしても見当たりませんでしたが、なんと倭寇の捕虜になってつれ去られていらっしゃったのです。わたくしはその顔をみて、なんだか似かよっていましたので、あるいはと思っていましたところが、どうでしょう、向こうからわたくしを認めて、わたくしの幼名を呼んで下さいました。どうかご主人さま、この方の冤罪を明らかにして下さって、元の主人を釈放して下さいませ。さすれば、わたくしはたった今この場で死にましても、本望でございます」

言いおわると声を放って泣きました。倭寇はみな一斉に冤罪を訴え出し、それぞれ生まれ故郷と姓名を名のりますに、事情が同じようなので、老王千戸が申しますには、

「冤罪であるとすれば、わしとしても自分勝手にはするわけにはいかん。元帥の役所に護送して、よろしくご処理を願うことにしょう」

そこで王興、

「ご主人さま、どうかわたくしもいっしょにやって下さいませ。証人になりたいと存じますから」

老王千戸は、はじめは承知しなかったが、王興にしきりと泣きつかれて、とうとう許してやりました。

その日、十三名の倭寇は、王興もいっしょに元帥府に護送されます。

普花元帥が申しますには、

「倭寇だとあらば、ただちに斬首に処せよ」

するとその十三名の倭寇は、みな口々に声高く冤罪を訴え、中の王興までも冤罪を叫びます。王国雄はすぐさま跪き、王興のいうところの事情をひととおり申し上げました。普花元帥はそれを信じて、すぐさま王国雄に倭寇犯の一団と王興もいっしょに、紹興の郡丞（副知事）楊世道のところへ護送させ、取り調べて報告させることにします。

元の時代の郡丞というのは、ちょうど今（明朝）の通判の職に当たり、太守（府知事）

の一級下で、太守と共に府の政務をおさめ、最も権力を有していました。その日、郡丞楊公はお白洲で事を裁いておられたが、はなはだ整然として見事なものです。（中略）

老王千戸は元帥府の命を受けて、みずから十三名の倭寇犯を護送して楊郡丞の役所の前につき、挨拶がすむと、これまでのいきさつをつぶさに申し述べます。楊公は役所の入口まで送り出し、またお白洲の座にもどります。まず王興が口を開いて冤罪を訴えると、かの倭寇犯人たちの哀号が大地を動かさんばかりに起こります。楊公は王興の陳述を聞き、まず楊八老を呼んで取り調べると、楊八老は姓名家郷を詳しく申し述べました。楊郡丞が問うて言われますには、

「塩屋ということであれば、その方の妻の実家の姓は何と申す?子供は有るのか」

そこで楊八老、

「妻の実家は東村の李氏でございまして、一粒種の男の子があって、世道と名をつけました。わたくしが漳浦へ商売に参りました時、子供はやっと七歳でございました。漳浦に三年ほど住み、それから倭国に捕われて参りまして、そのあとまた十九年たったのでございます。家を離れて以後、音信が通ぜず、妻子の生死もわかりませぬ。もしも子供が無事に育っていますとすれば、もう二十九歳になっている勘定でございます。お殿さま、うそだ

とお疑いでしたら、豔屋県の役所へ文をつかわされて、父母妻の一族姓名をいちいちあたってお調べ下さいませ。さすれば、わたくしの冤罪も晴れることでございます」

さらに王興にたずねると、その申し立ても全く同様であります。するとほかの者がまた一斉に冤罪を訴えます。楊公がいちいち詳しく調べますと、みな福建の者であり、同時に捕虜になったものであります。楊公はしばらく考えこんでいましたが、

「とりあえず留置しておき、文書を本籍地に発して来歴を調べた上で、釈放するであろう」と言い付けます。かくて閉廷して官舎に帰ると、母親の楊老夫人に会いましたが、しきりに不思議だ不思議だとつぶやいていますので、老夫人がたずねて申されるには、

「お前、今日どのようなお裁きをしたのだえ？　しきりに不思議だ不思議だと言っておいでのようだが、どうしたのだえ？」

それで楊公は申しました。

「王千戸が倭寇十三名を護送して参ったのですが、その者どもはみなわが中国の人民であって、倭奴の捕虜になっていたもの。実はみな贋物の倭人で本物の倭人ではないと申すのです。その中の一人、楊復というのは、陝西豔屋県の者で、なんでも二十一年前に妻の李氏と別れて漳浦へ商売に行き、三年の後、倭寇の乱にあって、捕虜になり、日本国へつれ

去られた。妻と別れる時、七歳になったばかりの息子があった。今では二十九歳になっている勘定だ。そういうのです。お母さんはいつも申しておられましたね、わたしが七歳の時、お父さんは漳州へ商売にいき、いったきりもどってこられないって。その者の家郷姓名はそっくりお父さんと同じだし、その妻子の姓名も寸分のちがいもありません。わたしは今年ちょうど二十九歳になります。世の中に、こんなにぴったり合う話があろうとは信ぜられません。それに王千戸に王興という家人がいて、それがまたこれは自分の元の主人だときっぱり証認しているのです。その王興は元の名を随童といって、漳浦で乱軍の中で主人と別れ別れになったと申します。これがまたお父さんの元の下僕とも同名ですね。だから不思議だと申したのです」

老夫人も思わず声を上げました。

「ほんに不思議だね。世の中には似たような話もずいぶんと多いけれど、ひとつひとつみな符節を合したように同じとは、どうも信じられない。話がどうも疑わしいから、明日もう一度審問をしなさい。わたしは屏風の蔭でぬすみ聞きしましょう。そうすればうそか本当か、たちまちわかります」

楊世道は承知して、次の日ふたたび十三名の倭寇犯人を呼び出し、またこまかに取り調

べを行ないますと、その申し立ては昨日と変わりません。老夫人は屏風のうしろから大きな声で叫んで申しますには、

「倅や、もうきかなくともよい。その塩屋県の人は、お前のお父さまにちがいはない。その王興も確かに随童です」

これにはさすがの郡丞楊世道も大いに驚き、ころげんばかりにして公座からかけ下りると、楊八老を抱き、声を放って大哭し、さっそく奥の部屋に招じ入れ、王興もついてきます。そこで母子夫妻三人は抱き合って哭き、全く夢の中で逢ったような気持ち。随童も哭き伏しました。ひとしきり泣いてから、やっと父親に拝礼を行ない、随童も元の主人夫妻に向かって、改めて叩頭の礼を行ないます、楊八老は息子に向かって言いますには、

「わしは日本国で、毎夜天に向かってお祈りをささげた。どうかふたたび家郷に帰り、もう一度妻子と会わせて下さるようにとね。今日天の神様のお慈悲でもって、とうとう念願がかないました。おまけに息子がこんなに立派に出世してくれてこれより嬉しいことはない。ところであの十二人は、みな福建の者で、わしといっしょに捕虜にされ、実際、やむを得ないことだったのだ。さあ、速く冤罪をそそいでやっておくれ。片手落ちだと怨まれぬようにな」

楊世道は父親の言葉を承って、ただちに十二人を全部釈放し、その上おのおのに帰郷の路費三両ずつを贈りましたので、みなみなお礼の言いようもありません。書吏に文書をしたためさせ、帥府に結果を報告する一方、祝宴の用意をさせます。役所内に湯を沸かして、八老に沐浴させ、全部新しく衣冠束帯をさせます。楊世道の娶った夫人の張氏が出てきて、舅に挨拶をし、一家全員ことごとく集まって睦みあい、その喜びはこの上もありません。

この出来事が紹興府前にぱっとひろまりました。本府の檗太守は、楊郡丞が父親を見つけたとの話をきいて、酒肴を用意してわざわざお祝いを述べにやってきて、ぜひとも父君にお目にかかりたいと申されるので、楊復は仕方なしに出て来て、檗公に会い、挨拶をすませると、主客に分かれて坐り、檗太守はしきりに喜びの言葉をくりかえすのでした。楊郡丞は酒を出してもてなします。酒を飲みながら檗太守は楊太公に向かって、どういうわけで長い間福建に逗留し、このような災難にあわれたのかとたずねました。楊八老が答えて、

「初めは一年か半年ですぐ帰郷するつもりだったのですが、はからずも下宿した檗家には、後家になった娘がおりましてね、年は二十三でしたが、ちょうど入婿を取って家の暮らしの頼りにしたいと思っていたところでしたので、わたしはその家に入婿になり、そのため

三年も居ついてしまったのです」

「そこに三年おられて、お子さんはできましたか」

「檗氏が身ごもり、男の子が生まれましたので、互いに別れられなくなったのです。そうでなかったらとうに帰っていたはずですが」

「お生まれになったご令息にお名前はおつけになりましたか」

八老は太守の姓名を知らなかったのです。すぐさまうけ答えて言いました。

「この県の息子に世道という名をつけていましたので、その檗氏に生まれた子には楊世徳と名づけました。姓はちがっていても兄弟だという意味をあらわしたのです。その檗氏の生んだ子は、今年二十二歳になる勘定ですが、あの母子の生死も行方もわかりません」

そう言いおわると、はらはらと涙を雨のように落としました。檗太守はそのあと幾杯かのむと、匆々に別れを告げて帰り、母親の檗老夫人にかくかくしかじかと話してきかせ、

「漳浦で婿入りしたという檗家は、お母さんと同姓ですし、年齢も同じです。この人はわたしのお父さまではないでしょうか」

檗老夫人、

「お前、明日宴席の用意をして、そのお方をおよびしておくれ。わたしは屏風のうしろで

のぞき見して確かめますから」

あくる日、楊八老は名刺をととのえて檗公のところへ答礼にやって来ましたので、檗公も酒を出してもてなします。檗夫人が屏風の蔭からこっそり覗いて見ますと、そのとき八老は衣冠もきちんとととのい、これまでの倭寇の様子はありませんから、たやすく認めることができました。檗老夫人はいくらも話をきかぬうちに、大声で叫びました。

「倅や、早くお前のお父さまをお部屋にお招きして父子の対面をなさい」

楊八老は事の意外にびっくりしました。檗太守はあわてて跪き、

「わたくし、お父上のお顔を存じ上げず失礼申しあげました。どうか不孝の罪はお許し下さいませ」

と、さっそく私邸に案内して、檗夫人にひき合わせ、抱き合って泣きました。その様子はちょうど楊郡丞のときと全く変わりはなかったのです。

今しも話をしているうちに、楊郡丞のもとから随童が使いに立って、太守の役所へ父親を迎えにまいりましたが、太守も父親をみつけられたと聞いて、大いに驚き、官舎の中にかけ込んで来て檗夫人に会い、叩頭の挨拶をします、檗老夫人は聞きただして、始めてそれが随童であったことを知りました。随童はそこで、別れ別れになってから王百戸に遇っ

たいきさつを述べました。一家をあげての喜びはたとえようもありません。檗太守が娶った妻の蒋氏も出て来て舅に挨拶をいたします。檗公は重ねて宴席の用意を命じ、楊郡丞を招いてわけを話します。太守と郡丞とが、ここに至って始めて本当の兄弟としての縁を知り合ったわけであります。その日楊家の若夫人張氏も招かれてやって来、一家をあげて喜びの酒宴が開かれましたが、その歓びはまことにたとえようもなかったのであります。（中略）

楊八老が日本国で十九年苦労していた間に、前妻の李氏の生んだ楊世道、後妻の檗氏の生んだ檗世徳は、立派に成人して、同じ年に進士に及第し、また同時に同じ紹興府の役人に選ぼれていようとは！今日天のお引き合わせによって枷と鎖の中から脱れ出ずるや、二人の夫人、二人の立派な息子に逢えたというのは、まことに古今まれなることであります。三日目には府の役人たちはことごとくこの珍しい出来事を知り、みなお祝いの言葉を述べにやってきます。老王千戸も祝いに来ましたが、王興が楊家の元の下僕であったことを知って、こころよく譲り渡し、また王興がさきに娶った妻を老王千戸の家においていましたので、千戸は檗太守と楊郡丞に敬意を表して、急ぎ使いを自宅に走らせて王興の妻を連れて来させ、夫婦をいっしょにさせました。檗太守と楊郡丞は同時に文書をつくって普花元

帥の所へ送り、その父を認めた顛末を述べました。そこで普花元帥はそのことを朝廷に上奏しますと、一門は位階称号を賜わります。肇世徳は父の姓に復して、楊世徳と名乗ることになりました。かくて八老は息子の任地で何不足なく栄華をたのしみ、長寿を全うして、ついに生涯を終わったのであります。（後略）